

2018年2月11日（日）「こぼれ落ちる恵み」

マタイ 15:21-28

21 それから、イエスはそこを去って、ツロとシドンの地方に立ちのかれた。22 すると、その地方のカナン人の女が出て来て、叫び声をあげて言った。「主よ。ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が、ひどく悪霊に取りつかれているのです。」23 しかし、イエスは彼女に一言もお答えにならなかった。そこで、弟子たちはみもとに来て、「あの女を帰してやってください。叫びながらあとについて来るのです」と言ってイエスに願った。24 しかし、イエスは答えて、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外のところには遣わされていません」と言われた。25 しかし、その女は来て、イエスの前にひれ伏して、「主よ。私をお助けください」と言った。26 すると、イエスは答えて、「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです」と言われた。27 しかし、女は言った。「主よ。そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパンくずはいただきます。」28 そのとき、イエスは彼女に答えて言われた。「ああ、あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように。」すると、彼女の娘はその時から直った。

【序論】

大学時代に心理学を受講したことがあります。その時に学んだ印象深い内容があります。それは、幼少期に親が自分をどれくらい無条件に受け入れてくれたかによって、その人が人生で経験する様々な「拒絶」に対する態度が違ってくるということです。多く受け入れられ、人間に対する基本的な信頼度が高い人は、たとえ一度拒絶されてもそう簡単には諦めない強さを持っている。しかし、受け入れられた経験が少ない人は、拒絶を跳ね除けて向かっていく力が弱いと言われます。その強さ弱さの責任はその人自身にはありません。しかし、それにも拘らず、その後の人生に大きな影響を与えるのであれば、一度は向き合う必要があるでしょう。私もこういったことを学んでみまして、自分自身が少しく見えてきたものです。

今日の箇所を心理学的に捉えることは、いささか視点を逸しているかも知れませんが、テクニストの中心人物である女性の粘り強さというのは、一種の「人間力」と言えるのではないかと。彼女の生い立ちなどは一切分かりませんが、人間としての強さを育んできた何かがあるでしょう。そして、驚くべき機転、霊的洞察力というものを見るのです。心豊かに主イエスににじり寄る彼女の姿勢から、私たちも学びたいと思います。

【本論】

本論 1. カナン人の女との出会い

それから、イエスはそこを去って、ツロとシドンの地方に立ちのかれた。(15:21)

文脈では、パリサイ人・律法学者との「きよめ」を巡る論争により、対立が決定的になった場面であります。主イエスは弟子たちを連れて「ツロ」「シドン」という地方へ退去なさいました。「ツロ」とは、ガリラヤのカペナウムから 20km ほど北に位置する地中海沿岸の貿易が盛んな町です。大きな岩に囲まれた軍事的要塞で、多くはギリシャ系の住民で占められていました。「シドン」は、ツロから更に北方 35km ほど行ったところになります。つまり、主イエス一行は異邦人の地へ行かれたことになる。サラリと書かれていますが、これは主イエスの公生涯において極めて珍しいことなのです。主がイスラエルから出られたのはこの時ただ一度だけです。よほどの理由があったに違いない。

考えられることとして、第一に、主はヘロデ・アンティパスに追われる身となっていたので、今は退くべき時として、ヘロデの領土を離れた可能性がある。第二に、パリサイ人・律法学者との対立がいよいよ色濃くなってきていましたから、当局による追跡を避けた意味もあったのではないか。第三に、これは本当に必要になっていた休息のためであったとも考えられる。ユダヤ人の多い地域では有名になり過ぎて、もはや休むことができなかったからです。弟子たちもヘトヘトであった。それで、一度静かな（自分たちのことを知っている人がいない）場所へ移動して、霊肉ともに休みを得ようと思ったのでしょう。

すると、その地方のカナン人の女が出て来て、叫び声をあげて言った。「主よ。ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が、ひどく悪霊に取りつかれているのです。」(15:22)

主イエス一行の思いとは裏腹に、ここでも彼らは隠れていることができませんでした。もはや異邦人の地域でも主イエスは有名だったのです。とてつもない癒しを行なう方であると。そのイエスを見かけた人が直ちに噂を広めてしまった。レベルは違いますが、ジャニーズの「嵐」の櫻井さんが宿泊したホテルの従業員がツイッターで暴露して問題になったことがありました。

ナザレのイエスが来たという噂を聞きつけて、草の根をかき分けて探し当ててきた人物がいました。「カナン人の女」とありますが、マルコ 7:26 では「スロ・フェニキヤ生まれのカナン人」とされています。基本的には、ギリシャ語を話すヘレニズム文化を背景としている人のことが言われていますが、「カナン人」であることが特に強調されている。この時代、「カナン」と呼ばれる町はなかったのです。マタイは敢えてこの表現

を使うことによって、旧約時代にイスラエルの仇敵となったカナン人を読者に思い起こさせている感じが致します。神の民に滅ぼし尽くすことが命じられたカナンの地の先住民の生き残りということになるでしょう。「ツロ」「シドン」という地は、旧約聖書の中で悪名高く、アハブ王が娶った悪女イゼベルもツロ出身であったということで知られています。このイゼベルはイスラエルにバアル宗教を持ち込みました。ゆえに、「カナンの女」と呼ばれることは、それだけで救いとは程遠いところにいる人を言い表していることになるのです。

この女性には、恐らく5～10歳くらいの娘がいて、その子は悪霊に憑かれていたようであります。子どもというのは悪霊に狙われやすく、親は特に守ってあげなくてはなりません。そこらじゅうに転がっているオカルト、占い、幽霊にまつわるものに、おかしな興味を抱いてしまうことがあるのです。そういうものに触れて生きている子どもの一つの特徴は、言葉遣いが非常に乱暴になるということです。症状が進むと、大人の男性が出すような低い声でしゃべったり、狂ったように叫んだりするようになる。この女性の娘の状況は相当深刻だったと思われます。

本論 2. 願いを拒否する主イエス

彼女が主イエスに呼びかけている「ダビデの子」という表現には驚かされます。これは、ユダヤ人のメシヤを指す独特の表現であるにも拘らず、異邦人がそれを知っていたということなのです。どこから情報を得たのか。「叫んだ」という言葉は原文では未完形動詞が使われていますので、彼女が叫び続けていた様子が伺えます。

しかし、イエスは彼女に一言もお答えにならなかった。(15:23a)

主イエスがここで沈黙を守っておられる理由は、恐らく「ダビデの子」という呼びかけにあったと思われます。主は、この称号で呼ばれることを拒絶はなさらないのですが、必ずしも喜んでおられるわけでもない。それは、誤ったメシヤ観がそこから広まってしまう危険性を孕む言葉だったからです。政治的メシヤ、あるいはただ癒しを行なうだけのメシヤとしての見方が、簡単に広まる傾向があった。主はこの時すでに、女性の信仰が本物であるかどうかを観察し始めておられます。

そこで、弟子たちはみもとに来て、「あの女を帰してやってください。叫びながらあとについて来るのです」と言ってイエスに願った。(15:23b)

弟子たちとしては、この女性に付きまといわれることは非常に困ることでした。再び人々が群がり、休めない状況になってしまう。さっさと追い払いたいが、主イエスは黙しておられる。もしかすると彼らは、さっさと癒しを行なって、この女を去らせてほしいと

願っているのかも知れません。

しかし、イエスは答えて、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外のところには遣わされていません」と言われた。(15:24)

主は弟子たちにはお答えにならず、その女性に向かって言われる。ここで主は何を言っておられるのでしょうか。「イスラエルの家の失われた羊」とは、イスラエル全体を言い表す表現です。「失われた羊」の元になっているのは、エゼキエル 34:16 の「**わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のものを力づける**」という表現でしょう。イスラエルの民は羊飼いを失った状態で、霊的に彷徨い歩いている。どこへ向かって行ったらよいか分からない。律法学者の教えに基づく宗教は、民を迷わせ、不自由にしていたのです。主イエスはこの民をまず神との契約に立ち返らせなくてはならなかった。それが主イエスの第一の使命であり、宣教のプライオリティの先頭に「神の民の救い」があったのです。主イエスのガリラヤ伝道はそのような動機で始まりました。選びの民が立てられた目的は、アブラハムを通して全世界に祝福が及ぶことではありましたが、そのためにはまず祝福が一箇所に集中しなくてはならなかった。それ抜きにして宣教は先へ進まないのです。主がカナンの女を突き放したのには、そのような理由がありました。

しかし、その女は来て、イエスの前にひれ伏して、「主よ。私をお助けください」と言った。
(15:25)

一度拒絶されても諦めない彼女の姿勢は、この方を置いて他に救いはないという確信から出ているのでしょう。

本論 3. 女の叡智

すると、イエスは答えて、「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです」と言われた。(15:26)

女性もしぶといですが、主イエスも折れません。これまでに異邦人に対して御業をなしたことがなかったかという、そういうわけではないのです。8章での、ローマの百人隊長のしもべの癒しは、異邦人に注がれた恵みの典型的な事例でした。しかし、主はここであくまでも「救いの順序」にこだわられる。「子どもたち」とは、イスラエル民族のこと。「パン」とは救いのことです。そして、「小犬」とは異邦人を指す。よく、ユダヤ人が異邦人を蔑む表現で「犬」という言葉が使われましたが、主はそれと同じではないまでも（「ペット犬」というニュアンス）、やはり幾分つまずきを与える言い方をしておられます。カチンときてもおかしくはありません。主は、今はまだ異邦人の救いのため

に広く宣教を始めていく段階ではないということを言っておられるのです。なぜか、それはイスラエル人がまだ十分に福音を理解し、信じるに至っていないからです。弟子たちでさえ、主イエスのことをまだよく分かっていない。幽霊と見間違えたことさえある。パリサイ人・律法学者は対立し、群衆は自分たちの思いのままにイエスを操ろうとしている。こういう状況で、異邦人が先に救われてしまうという状況を、主は認めておられなかったのです。ところが。

しかし、女は言った。「主よ。そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパンくずはいただきます。」(15:27)

この驚くべき返し。この女性が言っていることに注目しましょう。彼女はまず、「**そのとおりです**」(Ναί κύριε 「はい、主よ」)と言って、主イエスが提示しておられる救いの順序を認めている。しかし、話はそれで終わらない。「**ただ**」(καὶ γὰρ 「なぜなら、また」)と。「おっしゃることはまことにそうなのですが、それでも…」という食らいつきです。彼女は何と、主が使われた「小犬」という言葉を逆手に取り、議論を展開していく。「小犬というものは、テーブルから落ちる食べ物の残り粕を食べるではありませんか」と。彼女が言わんとしているのは、食べこぼしたパン屑、即ち、救いのおこぼれになら、私もあずかることができるはずだということです。「神の恵みは溢れて余りあるほど豊かなものではないのですか?」「あなたがこの異邦の地に来られたということ自体が、恵みが溢れ出していることの証拠ではないのですか?」

主イエスが常々「パン」を用いて「救い」を表現して来られたことを思い起こすでしょう。やがてご自分の体が十字架上で裂かれ、「いのちのパン」として多くの人々にいのちを与えるようになるということを、5000 人の給食をもって示されたばかりでした。しかし、弟子たちにも群衆にもこのパンの意味は未だ隠されていたのです。ところが、この異邦の女性が彼らよりも先にこのパンの意味を悟ってしまった。彼女は自分が恵みにあずかれる状況ではないことを知っていたにも拘らず、神の恵みはその枠組みを超えて自分に注がれ得ることを信じたのです。

【結論】

私たちはもう一度「信仰」とは如何なるものであるかを思い起こしてみたい。信仰とは、私たちががんばって信じることではありません。そうではなく、信じるのできない者をも救うことがおできになる神の恵みの大きさを信じるのが信仰であります。私自身のことを申しますと、この真理を伝えている自分自身が本当に大丈夫だろうかという不安に苛まれることがあるのです。自分の中にはその信仰を支える強さがないとい

うことを知っています。なぜなら、自分は罪を犯さずには生きられない人間だからです。しかし、そういう私でさえも憐れんでくださる神がおられるというメッセージを、御言葉を通して繰り返し聞くのです。そして、その御言葉にすぎること、これが信仰なのではないでしょうか。

牧会者の務めというのは、繰り返し罪を犯して、その告白に来る信徒に対し、何度でも赦しの福音を宣べ伝えることだと思います。願わくは、罪を犯してほしくはない。そして、犯さずに生きていける道を提示しなくてはなりません。その時は厳しく神の戒めをお伝えしなくてはならない。しかし、罪を犯してしまい、それを告白して来られた時には、赦しの恵みを語るだけなのです。神様が私たちに対してしてくださっていることとは、まさしくそういうことなのではないでしょうか。

カナンのは女は、値しない者にさえ注がれ得る神の恵みを信じました。そして、娘は癒されました。私たちも、神の恵みを小さく見積もってしまうことがないように。赦しが無限であるということを信じ続けることができますように。

【祈り】

憐れみ深い主なる神よ。救いは、まず神の民から始まっていかなくてはなりません。しかし、そこに割り込むかのようにして、カナン人の女性が恵みを奪い取っていききました。そして、主イエスはそのような姿勢を喜ばれました。私たちも、自分の救いについて消極的ではられません。あなたが如何なる罪人をも救うことができになる神であると告白します。私をも憐れむことができになる神であります。あなたがそれほどまでに大きい方であるということを、私たちは信じています。どうか、一人一人の救いを全うしてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

アブラハムを通して全世界を祝福すると約束し給うた、父なる神の愛。

イスラエルの救いを最優先とし、尚もカナンのは女を憐れみ給うた、主イエス・キリストの恵み。

ご自身の真実をもって、依り頼む者の救いを全うし給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。